

# 地域福祉に関する意見交換会の 結果について

高知市地域共生社会推進課



# 1. 概要

## (1) 目的：

第2期 地域福祉活動推進計画（2019～2024年度）の推進に向け、「市民・団体が広く地域福祉について知り（学び）、関わってもらおう（つないでいく）方法～市民への効果的な情報発信～」をテーマに意見交換会を実施する。

## (2) 実施背景：

### ①地域福祉活動推進計画 記載事項

【基本目標2 「おたがいさま」「ほおっちょけん」の住民意識づくり】

⇒ 2-1 地域や福祉に関心をもつ機会づくりの推進

⇒ 2-2 保育や学校教育や生涯学習と連携した啓発のしくみづくり

【基本目標4 地域や福祉の担い手づくり】

⇒ 4-1 多様な担い手の発掘と育成の仕組みづくり

⇒ 4-2 既存の活動をつないでいく支援

### ②地域福祉活動計画推進に向けた状況

⇒ 3ページ「令和3年度 第2回推進協議会 委員提案内容について」

参照

## (3) ねらい：

①これまでの活動の中での手応えのあった出来事について共有できる。

②地域福祉に関心の薄い市民への効果的な情報発信について、具体的にそれぞれの立場から意見交換できる。

③ライフステージ毎の市民への効果的な情報発信について、意見交換ができる

(4) 内容：

①高知市・高知市社会福祉協議会の活動紹介

②下記テーマに関する意見交換会

「市民・団体が広く地域福祉について知り（学び）、  
関わってもらう（つないでいく）方法～市民への効果的な情報発信～」

※意見交換会実施前に下記内容の事前アンケート実施

①市民・団体が広く地域福祉について知り（学び）、関わってもらう  
（つないでいく）方法について、考えられる具体的な方法

②情報発信について、ターゲットを定めるとすれば、どのような情報  
発信が効果的と考えられるか

⇒アンケート結果については4ページ参照

(5) 開催時期及び参加者数：同じ内容で2回開催（参加可能な時間帯に参加案内）

令和5年3月6日（月） 10:00～12:00 地域福祉計画推進協議会委員5名

14:00～16:00 地域福祉計画推進協議会委員5名

# 令和3年度 第2回推進協議会 委員提案内容について

## 【学びの場の拡大方法】

「学びの場」をどのように広げていけば、地域住民みんながこの地域福祉に関われるのかの検討が必要

## 【新しい広報や情報提供の在り方】

協議会での動画での情報発信(試行的)など、楽しみながら地域福祉について考えることができるような映像や資料の提供の在り方等の検討が必要

## 【地域福祉を知る市民の育成】

いきいき百歳体操を通じながら健康を考えると福祉を考えると地域住民みんなが地域福祉についてよく知っている、そんな市民を育てていくためにできることの検討が必要

## 【情報を知らない市民や団体のつなぎ方】

様々な地域福祉に関する情報を知らない市民や団体のつなぎ方の検討が必要

## 【協議会の効果的な活用】

コロナ禍の協議会開催(短時間開催)で、事務局への質問やそれぞれの立場の方からのご意見を伺うのみで終わってしまうことがある。

## 検討テーマを絞った意見交換の実施

検討テーマ(案):「市民・団体が広く地域福祉について知り(学び)、関わってもら(つないでいく)方法  
～市民への効果的な情報発信～」

# 意見交換会 事前アンケート結果

## 【「どのような世代」への「どのような情報発信」が効果的と考えられるか】

保育・幼稚園児

小学生・中学生・高校生

大学・  
専門学生

働いている世代

退職世代

現役世代は、余裕のなさから地域で暮らしながら地域を知らない人も多いのではないかと。子供が教育機関を卒業すると余計地域のこと疎くになってしまう。この世代への情報発信は難しい。

働く世代は仕事に携わっていることもあり、担い手として参加することは厳しいと思う。

退職世代は、自分のこととして地域福祉を感じたり、当事者になることが多いと思う。

市の若い職員と地域で活躍している団体等との協働での地域活動

地域福祉の担い手としての育成

町内会・自治会の中での映像を利用した発信

高知市の現状・未来・今の取組を伝える授業

町内状況に関心のある協力的な住民への発信  
(自分の住む町内に関心をもってもらう)

発達年齢に応じたの情報発信

地域の中での実際の活動からの学び

身近な・自分たちも参加できるかなと思える地域福祉活動等の福祉教育(学校の先生も対象とした)

地域福祉の担い手としての活躍の場の創出

福祉教育(ほおっちょけん学習を通じた高齢者についての理解)

地域と関わることができる情報・ボランティア活動の情報発信

地域共生社会の事業の動画放映

### 【高知市・高知市社会福祉協議会 実施内容】

ほおっちょけん学習  
(保育園・幼稚園・小学校・中学校・高校・専門学校・大学対象)  
【高知市社会福祉協議会実施】

企業版ほおっちょけん学習  
(企業対象)  
【高知市社会福祉協議会実施】

ふれあい体験学習  
(小学校・中学校・高校等対象)  
【高知市社会福祉協議会実施(高知市委託事業)】

#### 【全世代への情報発信】

- ①地域共生社会に関するポスター作成
- ②【イベント】みんなのほおっちょけん展 in イオンモール高知
- ③【イベント】"ほおっちょけん"がオーテピアをジャックする  
【高知市・高知市社会福祉協議会実施】

# 2. 結果

## (1) 午前の部 (10:00~12:00)

### ①参加者

高知市地域福祉計画推進協議会委員			
	所属	役職	氏名
1	高知市地区社会福祉協議会連合会	代表	田所 稔
2	高知市民生委員児童委員協議会連合会	副会長	岩田 護
3	サードプレイスすろー	代表	高橋 英美
4	特定非営利活動法人地域サポートの会 さわやか高知	会長	三谷 英子
5	初月地区防災連合会	会長	松下 潤一

【高知市社会福祉協議会 地域協働課】  
富山地域福祉コーディネーター  
西川地域福祉コーディネーター

### ②内容詳細 (抜粋)

⇒次ページ以降参照



## 【地域福祉に関心の薄い対象者について】

⇒現役で働いている世代、子育てしている世代は地域福祉に無関心というよりは自分達の生活のことで余裕がない印象を受ける。実際のところ、物理的な状態で関わりができないのか、本当に無関心なのかは少し深掘りしていく必要がある。実際に自分が困っているテーマは非常に興味を持って参加している。無関心というよりは、こちらからアプローチをどうやって仕掛けていくかということではないか。

⇒地域の活動についても、子育て世代は接点がなく、知らないだけの可能性がある。実際に知ると子どもや親の世代も「何かお手伝いができないかな」という気持ちになるのではないか。また、知ることで今は活動がすぐにできなくても、できる時が来たら協力できる人ができるのではないか。

⇒退職者の中にも元気な高齢者がたくさんいる。特に女性は生活に密着していて、隣近所に関心が高く、情報を知っている。私たちがそういった人材を掘り起こせていないだけの可能性もある。

## 【ボランティアの受け手の意識の変化】

⇒受け手が「してもらって当たり前」「どうしてちゃんとやってくれないのか」という思いの人もおり、有償ボランティアを担う人もしんどい思いをする場面ができて担い手が減ってきている現状がある。



## 【地域福祉に関心が向く「きっかけ」】

⇒退職して、隣人からの困り事、地域の回覧板、地域の情報誌等、自分のこととして考えられる内容等に出会った。

⇒有償ボランティアの活動のきっかけも「問題意識」。例えば、活動を始めた時には「団塊の世代が高齢者になった時に社会がどうなるか」ということ。若くても、家族に介護の人、障害の人がいると非常に意識が高く、そういった方が口コミで活動に参加してくれている印象がある。

⇒「困っている現状」、「困っている人がいる」ということ、まずは知ることから始めると、今、無関心と思われる人たちも何か巻き込んでいける可能性がある。人の困りごとを聞いて、「知らないよ」という人は人間の心理として少ないと思う。

⇒ただ今の時代、地域では困っていることも分からないし、どんな人が住んでいるのかも分からない現状がある（特にアパート等に住んでいる場合）。

⇒地域の方で必要性を皆感じているが、ただ会をするからというだけでは参加しない現状がある。

⇒地域住民が「つながりを持てる環境」を育てていくのが一番大事ではないか。きっかけづくりとして一番やりやすいのはイベントで、子どもを巻き込んだ場合、親御さん、おじいちゃん、おばあちゃんも出てきてくれる状況がつながりを持ちやすいのではないか。

⇒地域によっては、中学生が地域のゴミ出しに困っている人のゴミ出しボランティアの活動を実施している。地域の人が困っていることを知り、活動を通して「ありがとう」と言われ、中学生が「やってよかった（やりがい）」という気持ちになる。次につながる可能性がある。

## 【地域の状況】

⇒町内会活動では、子どもがやりたいことを実現したり、子育て世代の要望を実現したりすることで、町内会活動に関心をもってもらう機会となっている地区もある。

⇒ゴミ出し等のボランティアを実際に継続する人がいる中で、その活動を知って手伝ってくれる若い世代の方もいる。町内会の中には普段知られていないだけで、意識の高い人や、気くばりの人がいることを知ることもある。

⇒地域の活動に大学生が参加している状況もあり、そういう大学生を地域の人間としても大事にしていきたい。

## 【活動の継続支援】

⇒活動の継続意欲をもってもらうために、活動数を増やしたり、今までの対応事例等をまとめて新たなボランティア希望の方に分かりやすく伝えるなど実施している。活動の振り返りをして、登録しっぱなしという状況にならないように意識してやっている。

⇒他の活動を知らない状況もあり、実際の困りごとを知ると、自分ごとになっていくことが多い。それが継続の動機づけとなる。

## 【活動のコーディネート】

⇒活動の内容も、家の中まで入っての活動などは本当に信用されていないと入れない場合がある。また、ちょっとした困りごとを中学生のゴミ出しボランティアがやってくれるのであればお願いしたいという事例もある。中学生との出会いが住民の方にとって初めてでも、その間に立つ地域包括支援センターや社会福祉協議会が信頼されていたら、活動の受け入れができる場合もある。関係機関や支援者が連携することにより、地域ニーズの取りこぼしがないように、コーディネートしていくことが大切になってくる。

# 【意見交換会当日ホワイトボードメモ】

## 知らない人に関心を持ってもらうために

誰？：子育て世代，現役で働く世代（物理的に無理？関心ない？）  
退職後（特に男性），中学生・高校生・大学生（高齢者のこと知らない）  
転入してきた方・アパートに住む方＝そもそも誰が住んでるか分からない

知る

退職後に広報など見て自分事として  
地域活動（大人と中学生が共に学ぶ）への参加  
困っていることを知る

※地域の中でご近所のこと等  
よく知っている人もいる  
→でもこちらが把握できていない。

※春野：つながりあり、  
地域活動参加あり、  
若い人がいなくて高齢化

きっかけ：家族に介護が必要な人がいる等意識＋ロコミ

↑信頼関係，活動者が増える

大学生とのワークショップ  
地域支援者との意見交換会

※コロナを理由にイベント中止  
+社会情勢  
⇒してもらって当たり前

活動

・ 知ってほしい世代の困りごと，関心事をテーマに

↑コミュニケーションが肝…防災なら支援計画訪問時に福祉ニーズもキャッチ！

初月では子育て世代が防災イベントに参加あり

- ・ 中学生と学ぶ
- ・ 中学生が地域の困り事（ゴミ出し）ボランティア
- ・ 祭り，運動会：子どもと保護者が来てくれる
- ・ 知ってほしい方がいるところに出向いて伝える（動画）

続けてもらえる工夫  
（困りごと，活動内容などを伝える）  
「ありがとう」がうれしい

コーディネート

知らせたい=知りたい  
一致すればBEST!?

知る

- ・ 広報
- ・ ホームページ
- ・ 町内版広報  
町内会で発信
- ・ 動画

何を

- ・ 地域の困りごと
- ・ 町内会も人いないよ!
- ・ 町内会って何?

誰に

- ・ 子育て世代が多い地域は  
子育て世代に
- ・ 町内会にしてほしいこと  
を伝える

活動

出来る人が出来る時に出来ることを

- ・ ゴミ出し手伝うよ
- ・ 大学生が地域活動（休耕田活用）

## (2) 午後の部 (14:00~16:00)

### ①参加者

高知市地域福祉計画推進協議会委員			
	所属	役職	氏名
1	高知市町内会連合会	会長	長尾 達雄
2	高知市秦地区社会福祉協議会	会長	葛目 顕
3	特定非営利活動法人土佐山アカデミー	事務局長	吉富 慎作
4	社会福祉法人土佐香美福祉会 特別養護老人ホームウエルプラザ高知	理事 施設長	津野 高敏
5	社会福祉法人福井保育協会福井保育園	園長	渡辺 秀一

【高知市社会福祉協議会 地域協働課】  
細木課長補佐  
馬場地域福祉コーディネーター

### ②内容詳細 (抜粋)

⇒次ページ以降参照



## 【地域福祉を伝えていきたい対象】

⇒民生委員児童委員活動，町内会活動等，手いっぱい，お手上げ状態になっている。今後は身近な町内の人に知ってもらいたい。

⇒保育園では，「ほおっちょけん学習」が子どもだけでなく，保護者にも伝わっていく。家に帰って「今日，ほおっちょけんが来てこんなこと教えてもらった。」と，ほおっちょけんの絵を貼ったりすると，保護者も関心を持つ。広報の一つの手段として，効果的だと思う。

⇒「ほおっちょけん」の動画が子供にも分かりやすく，伝わりやすい内容。保育園でも実際に年長児，5歳児中心に実施するが，5歳児でも全部理解できる内容となっている。

⇒学校の先生にも関心を持ってもらうと，子ども達にも伝わりやすいのではないか。

⇒地域の中でも退職を迎えられた方の中に，何か関わりたいのに関わらず，きっかけがない層がたくさんいるのではないか。アプローチをすれば，やってみようという人は必ずいると思う。

## 【最近の地域の状況】

⇒昔であれば住む場所も働く場所も同じ地域で，絶対に地域と一緒に協力しないと何にしても出来ないし，困る状態があった。今は，仕事場と住むところが違うので（職住分離），住むところにおけるネットワークが張れない状況。そんな中，活動したい人のエネルギーを応援してあげる方向がいいのではないか。

⇒その人がもっと自分でやりたいというプラスの思いの部分を「0」から「1」にする力を持っている人を支援することで，周りから手伝う人が現れる。手伝うことによって，仲間ができる，つながりができるというようなことができないか。

## 【地域福祉活動の伝え方】

⇒もともと住民でやれていたことが今できなくなってきた、だから助け合うってことを「地域共生社会」という言葉を使わないといけない状況。この状況では、自身にとってのメリット・デメリットみたいな感覚でしか想像できない人がたくさんいる可能性がある。何かそれを少しでも「楽しいもの」に見せるしかない。（例：可愛く見せるものとして「ほおちょけん」、手伝うことを楽しく見せる意味での「地域通貨プラットホーム」）。

⇒江戸時代からの人口マップをみると、緩やかに人口低下した時期があり、戦後以降急激に増加して急激に減っているというので、それを考えると、そもそもなんで助け合わないといけないのかということから、こういう社会は素敵だよってことはみんな理解している。しかし、マイルドな伝え方ではなく、人が減ったら絶対に助け合わない無理だし、税金のシステムだけじゃ無理だよねっていうことを、直近まできているというシビアなこととして、言った方がいい。

## 【人がつながる交流の場】

⇒人がつながることが大事であるが、「つながる場」としての集う「場」も必要。地域によっては公民館がない地域もある。

⇒最近、スーパーの空きスペースの活用等の提案もあり、民間の力を活用していくことも考えられる。

⇒地域にある高齢者施設、障害者施設、保育施設が今後交流していく中でも、子どもの体験、高齢者の体験、障害者の体験、職員の体験としてつながっていくのではないか。今はコロナで交流が減っているが大切だと思う。

⇒保育園と高齢者施設の交流を長年やっているが、お年寄りの方も子どもが参加することで喜んでもらえる、子どももお年寄りから拍手をもらうことでやりがいを感じる。交流が入口となって重要と思う。

## 【多様な活動への入口と活動の仕掛け方】

⇒活動への入り口というのは、多様に準備すべきではないかと思う（例：面白い、やってみたい、役に立つかもみたいな入口）

⇒活動を通して地域の困りごとを見ること、感じることでの気持ちの変化。活動する前は「なぜ自分たちが関わる必要があるのか」という思いが、活動を通して「ありがとうございます」って言われて「役に立っているんだ」と実感する。自分がその立場になった時に、「こういう団体があったらありがたい」と感じる。

⇒平均年齢40代後半、500世帯の町内会長さんの活動で、働く世代が横につながりたくて仕掛けているのが、「ウナギの蒲焼教室」や「多肉植物の寄せ植え教室」。二見、福祉や町内会活動に関わりがないような活動から、人が集まり、顔がつながり、頼みやすくなって町内会活動に来てくれるようになった。

⇒中学校の生徒会が地域住民の不燃物のゴミ出しボランティアをする中で、子どもたちが「ありがとうございます」と言われるのがすごく嬉しかったという感想があり、もっともっと活動を広めていきたいという意見も出ていた。

⇒市社協で「企業版ほおっちょけん学習」を、民間企業の新任者研修として実施。その中で、社員の方が生活支援ボランティアとして地域で困っている方の清掃に参加。活動を通して、「こういうことに困っている人がこんなにいたんだ」と実感し、20代新人社員の方がプライベートでもやっていきたいと語っていた。職業人というフィルターを使って経験することで、「自分は関わりたかったんだ」ということに気づいてもらう取組もある。

⇒「川上と川下の交流」の考え方として、現在、川下には人がたくさんいて、川上は人がいなくなっている。しかし、川上が景観が維持できないと山が崩れたり、水が流れてこなくなると川下も困る現象が起きる。上流に住んでいる人と、下流に住んでいる人の交流を企画した時に、①川下の災害の時に逃げる先としての川上の住人との交流②川上でのキャンプでは、目先の楽しさとして②が好評だった。今楽しいことで活動を設計して、災害が来た時に結果として防災につながっていたんだとなるのもいいのではないか。



### 【町内会連合会での新たな取組～女性の力の活用～】

⇒町内会連合会は市内にある1250の町内会の中の810が正式な会員として入会している。町内会連合会の役員の構成としては、70歳代。どんどん年齢が高くなっており、現在、ターゲットとしているのは女性。令和4年度より、女性部会の立ち上げを行った。町内会長に女性が結構おり、女性は小学校、中学校等でPTAの役員をやっていて、子どもの卒業で活動をやめてしまうのが大変もったいない。今回、3年以上活動を継続してくれる条件で募集し、15の方が手を挙げてくれた。常時参加してくれる方は10人を割らない。

### 【特別養護老人ホームでの新たな取組～多世代との交流～】

⇒特別養護老人ホームでの子ども食堂の展開、地域のボランティア団体に来てもらう取組等、これまで職員が知らなかった地域の活動を取り入れて、多世代の方と関わることで職員の視野が広がってきている。また、働く場で学んだことが住んでいる場所に波及していく可能性がある。

### 【眠っている地域のお宝（人材）の見つけ方】

⇒我々の知らない隠れた地域活動は市内にもたくさんある。（例：大学生が農家にバイトに行くチーム、農協の清掃メンバーが地域の木の伐採や草刈りをする等）

⇒土佐山では、6月と10月に道路愛護作業に住民全員が参加し草刈りをする。今後、住民だけでは実施継続が厳しい状況になる中で、県外の人に参加費5000円を払って草刈りにきてもらうイベントを土佐山アカデミーが企画（「草刈りマスターズ」、18kmの道路を18ホールに見立て、草刈り優勝チームにはグリーン手ぬぐいを贈呈）。全然関係ないことから楽しいイベントとして、地域の住民に県外の方を迎え入れてもらうことも考えている。課題をチャンスにしている。

⇒町内会活動などのやらなければいけない活動が多数ある状況は、様々な取組を生み出すネタの宝庫。

## 【地域のさまざまな活動】

⇒青年団などの「青年活動」、町内会活動などの「地域活動」、福祉を中心とした「地域福祉活動」が現在分かれているが、人が多い時は分業できていたが、現状ではできない状況となってきているのだろうか。一緒にしていった方がいいのだろうか。

⇒分業になりすぎるとだめだが、一人の人に負担がかかりすぎるのは厳しいのでバランスが大事ではないか。

⇒「地域活動」と「青年活動」は一定の役割や年齢があり、しほりがあるが、「地域福祉活動」は支え合いの活動なので役割や年齢のしほりはない。そこを無理やりくっつけようとするので軋轢があるのではないか。うまくつなげていくことが大切ではないか。

## 【よさこい祭りへの参加～「チームほおっちょけん」～】

⇒目先の楽しさ、もっと高齢者施設と保育園がつながらなくてはいけない等の視点から、「よさこい祭り」に「チームほおっちょけん」としての参加はどうだろうか。そこには保育園や高齢者施設、障害者施設、町内会、防災会等様々な各種団体の方、若者、高齢者、ひきこもりの方の社会参加への第一歩となるような取組。様々な人が集まり、本番までに練習をしてつながっていくことにより、高知市の地域共生の取組を全体広報することもできるし、皆が楽しくつながれるのではないか。

⇒「ほおっちょけん」が1年目は一人で踊っていて、これはほおっちょけんとなって、皆が集まってくる、または一人で踊っている動画を流して、参加者を募るなどのプロデュースはできるのではないだろうか。

# 【意見交換会当日ホワイトボードメモ】

誰に：町内の身近な方，子どもと保護者，教員，退職世代

町内会：高齢化，女性をメンバーに（PTAを活かす），輪番制  
施設：施設の外の状況が分からない

昔から行われていた助け合いを  
「地域共生」という言葉で  
伝えないといけない社会

何を：ご近所（町内）での助け合い

社会構造（人口減少，高齢者増加）などの現実

人生100年  
職住分離

Whyを伝える

活動したい人を知る

活動：外から人を呼ぶ ↓町内会はネタの宝庫  
（日頃しないといけないことを楽しく）

やりたい人を応援する（0→1）

※福祉はマイナスを0にするイメージ  
人が集まれる場が必要  
大学生が農業バイト

（学生同士のつながり，学生と農家のつながり）  
土佐山アカデミー：移住など  
しちりんしゃ：林業の助け

入口

やってみたい，面白そうと思う  
多様な入口

活動を通じて「ありがとう」の言葉  
知って見て実感する

活動・つながり

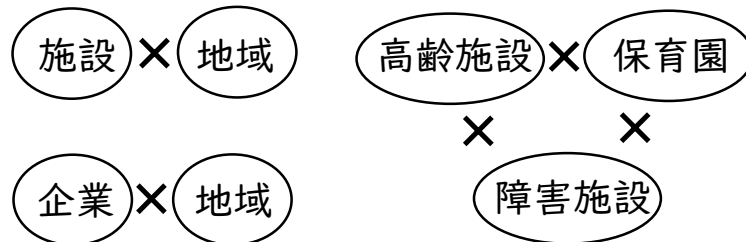
参加してみたことでつながる  
活動が続く，広がる

## 知らせるための方法

- ・ポスター：対象に合わせて  
目に留まるデザイン  
第一印象  
話題になる
- ・ほおっちょけん学習：キャラクター  
(福祉教育) グッズ
- ・地域通貨プラットフォーム (楽しみをプラス)
- ・よさこい祭りにチームほおっちょけん

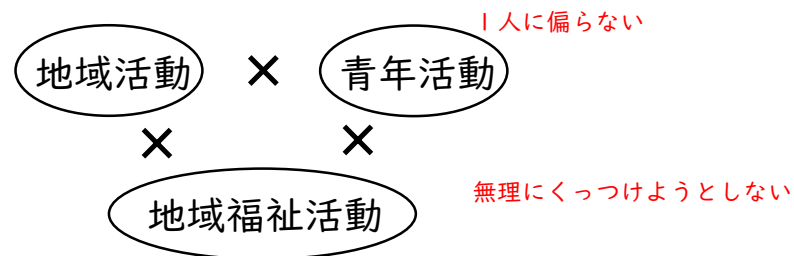
## 気付いてもらう取組

- ・セントラル新人研修  
職業人への働きかけ
  - ・施設での子ども食堂
- 体験を通じて



目先の楽しさ

## 川上と川下の交流：川上でキャンプ



# 3. まとめ

「市民・団体が広く地域福祉について知り（学び）、  
関わってもらう（つないでいく）方法～市民への効果的な情報発信～」

## 1. 対象

(1) 子どもたちを対象に

⇒ 両親, 祖父母までの影響力の可能性

⇒ 学校の先生にも福祉教育に関心をもってもらう

(2) 退職者

(3) 身近な町内の人

(4) 小学校・中学校でPTA活動をしていた女性たち

## 2. 内容

(1) 日本の人口減少等からも分かる現状（人が減ると助け合わないと無理な状況）

⇒直近まで来ているシビアなこととしての伝え方

## 3. 方法

(1) やりたい人のエネルギーを応援する方向

(2) 働く場での学びを住んでいる地域で活かしていく（ボランティア活動）

(3) 何か関わりたいのに関われず, きっかけがない方の発掘とアプローチ

(4) 少しでも楽しいものに見せる

例：可愛く見せる「ほおっちょけん」

手伝うことを楽しく見せる「地域通貨プラットフォーム」

(5) 人が減ると助け合わないと無理な状況が, 直近まで来ているシビアなこととし

ての伝え方

## (6) 活動の一番最初の入り口

⇒多様に準備する必要がある（面白い、やってみたい、役に立つかも）

⇒福祉と関係のない、楽しそうだな（目先の楽しさも含む）という仕掛けが大事

⇒一見、福祉や町内会活動に関わりがない活動から、人が集まり、顔がつながり、頼みやすくなって町内会活動につながる。

例①：町内会活動での子供がやりたいことの実現，子育て世代の要望の実現

例②：町内会での「うなぎの蒲焼教室」「多肉植物の寄せ植え教室」

⇒活動を通して地域の困りごとを見ること，感じることで気持ちの変化

例①：中学校生徒会 地域住民の不燃物のゴミ出しボランティア

⇒子どもたちが住民からの「ありがとう」の声掛けによる活動の継続及び広がり

例②：企業の新任者研修での「企業版ほおっちょけん学習」の活用

⇒職業人というフィルターを使って経験することで「自分は関わりたいかったんだ」ということに気づいてもらう

⇒地域住民が「つながりを持てる環境」を育てていく（例：子どもを巻き込んだイベントで親，祖父母まで参加の可能性）

---

(7) 女性の力を町内会連合会活動へ

⇒小学校や中学校でのPTA活動をした女性の力を活かす

(8) 特別養護老人ホームでの多世代交流

⇒子ども食堂運営や地域のボランティアの受け入れによる職員の視野の広がり,  
働く場で学んだことの住んでいる場所への波及の可能性

(9) 人がつながる交流の場

⇒つながる場としての公民館等の「集う場」の必要性。

⇒民間の力を活用した場の確保。

⇒地域にある高齢者施設, 障害者施設, 保育施設の職員・利用者の今後の交流